

第3章 川崎市の歴史文化の特徴

1 歴史的背景

(1) 原始

ア 旧石器時代

市域で人類が生活を始めた最も古い痕跡がみられるのは、33,000年前の鷺ヶ峰遺跡（宮前区）です。この頃は後期旧石器時代と呼ばれ、人々は石器を使って狩猟・採集しながら移動する遊動生活で、定住はしていません。鷺ヶ峰遺跡から出土した石器の数はわずかで、狩りに使用した石器や加工用の石器などです。関東地方における旧石器時代の二大遺跡集中地である相模野台地と武蔵野台地の間に位置する川崎市域には、この二つの地域から旧石器時代の人々が繰り返し回遊移動してきて、狩猟や最終などの活動を行っていました。

市北西部の多摩丘陵上には、鷺ヶ峰遺跡以外にも10か所以上の後期旧石器時代の遺跡が確認されています。



鷺ヶ峰遺跡の出土品

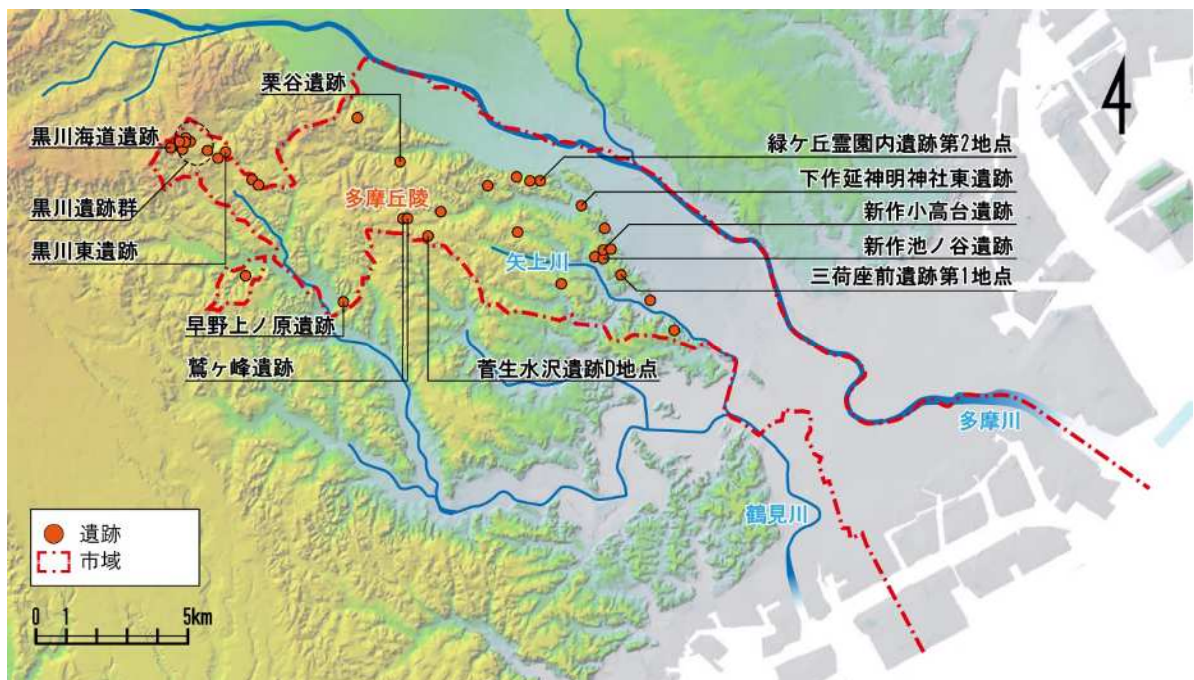


図13 旧石器が発見された市内の遺跡の位置／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

イ 縄文時代と海岸線の位置の変化

16,000年前になると、日本列島で縄文土器が使用されるようになります。石器は狩猟用の槍先につける尖頭器に加えて、新たな狩猟道具である石鏃が加わりました。植生はナラ類を主とする落葉広葉樹が広く分布し、ドングリやクルミ等の堅果類を利用して生活していました。市域でも、多摩丘陵上に人々の生活の痕跡が色濃く遺されています。

縄文時代草創期（16,000～11,500年前）には、細い粘土紐を貼り付けて装飾する微隆起線文土器が万福寺遺跡群（麻生区）で発見されており、質・量ともに全国屈指の資料群として評価されています。



万福寺遺跡群の微隆起線文土器と石器

縄文時代早期（11,500～7,000年前）になると、市内でも定住的な生活の痕跡が確認されています。菅生水沢遺跡（宮前区）や井田中原遺跡（中原区）では、数軒の竪穴住居からなる集落が見つかります。この時期には、縄文海進で東京湾が内陸まで入り込み、人々は魚類や浅い砂泥の環境に生息する貝類を食料として盛んに利用し、貝殻等を廃棄した場所が貝塚になりました。市域で最も古い貝塚は子母口貝塚（高津区）で、台地上の東西約100m、南北約150mの範囲に4つの小規模な貝塚（地点貝塚）が発見されています。

縄文時代前期（7,000～5,500年前）には、海進が最も進み、鷺沼遺跡（宮前区）や稲荷森遺跡・黒川東遺跡（麻生区）のように、内陸部にもムラが立地していました。一方で、海岸線に近い地域では、貝塚がいくつも発見されています。この頃につくられた縄文土器は、形や大きさが変化に富み、装飾性が増し、獣面や人面の突起を持つものが現れることが特徴です。

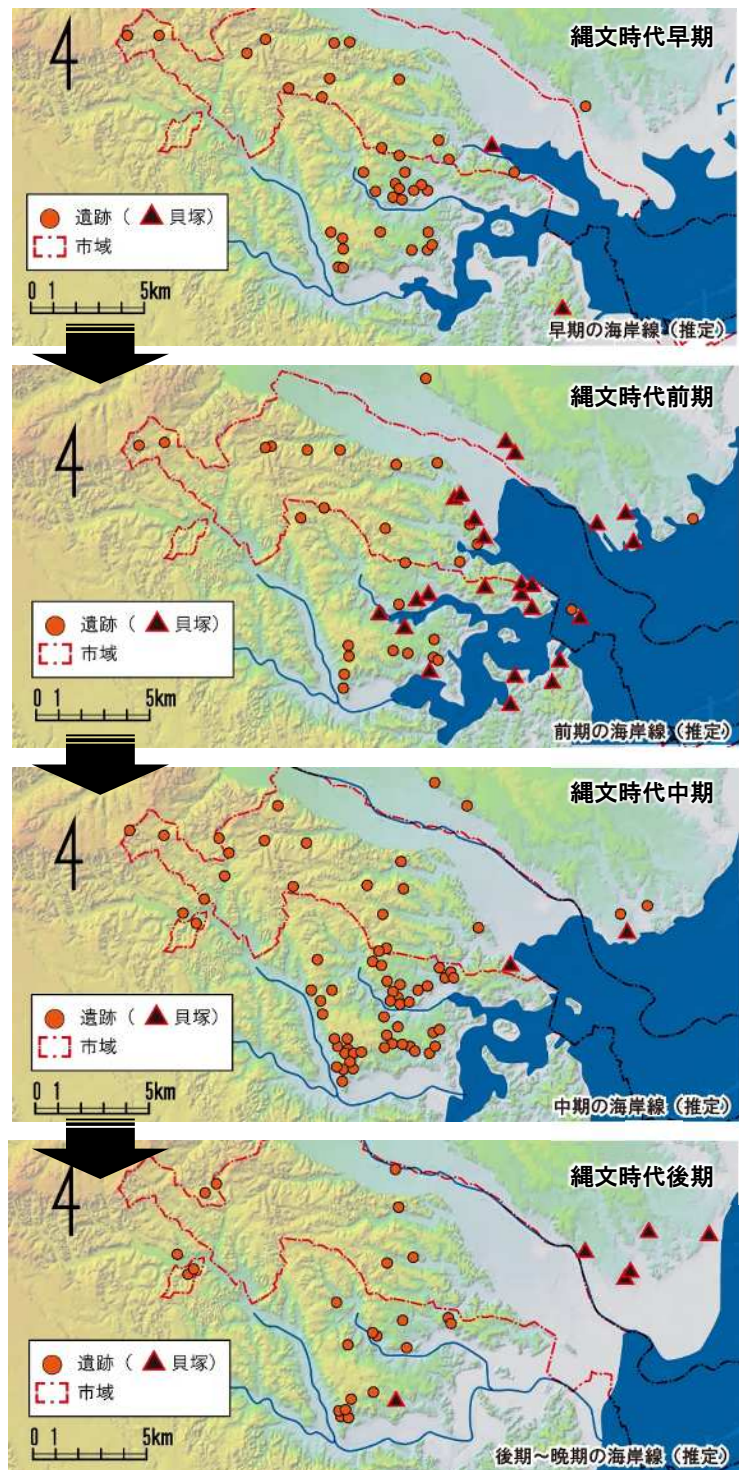


図14 縄文時代（早期～後期）の海岸線と遺跡の分布の変遷
／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

縄文時代中期（5,500～4,500年前）は、現代と同じような気候になり、海退によって湾奥の干潟は陸地になり、海岸線は現在の小杉付近まで後退しました。東京湾対岸の千葉県や隣接する横浜市では大規模な貝塚がつくられますが、市域では貝塚はほとんどありません。しかし、遺跡の数が急激に増え、集落の規模も大きくなります。これは環境が安定したことにより、シイ・ニレ・ケヤキ・ブナ・クヌギ等の森林が形成され、植物食糧を安定的に確保できるようになったためです。土器は大型化し、文様構成も複雑化し、装飾も盛んにほどこされます。石器は、土掘具として使われた打製石斧や、磨製石斧、木の実の加工に使われた^{たたきいし} 敲石・^{すりいし} 磨石・石皿等が出土しています。

縄文時代後期（4,500～3,200年前）には全国的な気候の冷涼化により海岸線はさらに後退し、市域では埋立が進む前の海岸線に近づきました。この時代には、丘陵を生活の拠点としていた人々にとって海産食料の確保が困難になったこと、富士山の噴火があったこと等から、急激に遺跡が減少しています。市域では、幾つかの遺跡で後期の土器を伴う住居が見つっていますが、詳しいことはわかっていません。

一方で、多摩川の流路内にある多摩区 No. 61 遺跡（宿河原縄文時代低地遺跡）では、通常では腐朽してしまう漆器や木製品、植物の種子等を良好な状態で発見しています。出土遺物の内容からドングリ等の堅果類のあく抜きをする「水晒し場」や、石錘（おもり石）を使った網漁を行っていた場所であったことがわかっています。

縄文時代晩期（東日本では 3,200～2,400 年前）には、東北地方の影響の強い土器が使われました。しかし、遺構を伴う遺跡は下原遺跡（多摩区）しか知られていません。

下原遺跡では、東北地方の大洞系土器を多数使っていたことや、この時期特有の文化を表す品物（土偶・土版・石剣・石棒等）が目立ちます。



下原遺跡の注口土器

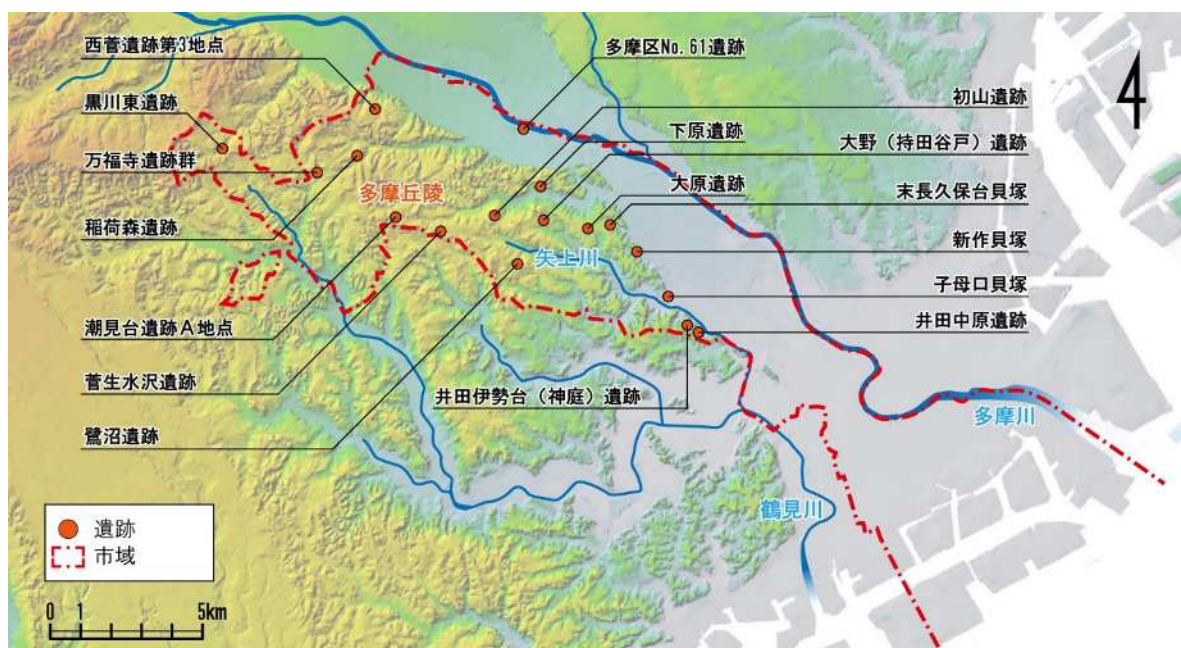


図15 縄文時代の主な遺跡の位置／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

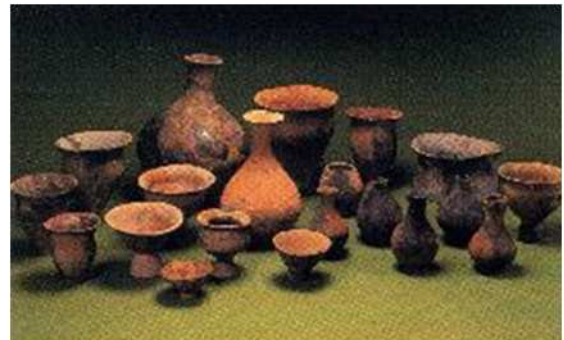
ウ 弥生時代

2,900～2,800 年前には、大陸から北部九州にいち早く稲作の技術やそれに伴う生活様式が伝えられ、食料生産を基盤とした農耕社会が始まりました。しかし、関東地方では、弥生時代前期にあたる土器の出土資料は極めて少なく、市域の弥生時代の始まりについて詳しいことはわかっていません。

梶ヶ谷神明社上遺跡（高津区）では、約 2,000 年前の弥生時代中期後半の竪穴住居 4 軒が確認されています。川崎市域に定住し、最初に稲作を行った人々のムラの跡です。非常に保存状態の良い土器類と鉄斧・鉄鑿とともに太形蛤刃石斧、環状石斧、磨石、石皿、管玉等、素材や用途を異にする豊富な資料があり、道具が石器から鉄器へと移り変わる様子を示しています。

後期（1～2 世紀）になると、東高根遺跡（宮前区）のように、下末吉台地の縁辺部に集落が作られるようになり、稲等の生産の場として谷戸を利用していました。

弥生時代の市域では南関東に分布する久ヶ原式土器のほかにも、中部高地の影響を受け神奈川県域で作られるようになった朝光寺原式土器や、北関東地方に分布する吉ヶ谷式土器等が使われていました。人々は、煮炊きにする甕や貯蔵に使う壺、供献に使う高坏や杯など様々な種類の土器を使っていましたが、弥生時代の市域は、各土器型式の分布の周縁部にあたり、甕は朝光寺原式土器、壺は久ヶ原式土器など、複数の型式の土器を組み合わせを使っていました。



梶ヶ谷神明社上遺跡出土の土器群



梶ヶ谷神明社上遺跡出土の鉄器



図 16 弥生時代の主な遺跡の位置／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

エ 古墳時代

畿内地方でヤマト政権が成立し、前方後円墳が盛んに築かれるようになると、地方の豪族たちが次第にヤマト政権の身分秩序に編入され、各地で同様に前方後円墳などの古墳が築かれました。

市域では、4世紀後半に、加瀬山（幸区）のそばに全長 87m に及ぶ前方後円墳の白山古墳が築かれました。白山古墳からは京都府椿井大塚山古墳出土三角縁神獣鏡の同范鏡（同じ鋳型から作られた鏡）をはじめとした鏡類や玉類が出土しています。

有力豪族による大型古墳の造営の一方で、小勢力の豪族も古墳の築造を始めました。

5世紀半ばになると、市域では小型の古墳が点在するのみで、突出した規模の古墳は造られなくなります。

しかし、5世紀末から6世紀末には白井坂埴輪窯跡（宮前区）で埴輪が生産されており、西福寺古墳（高津区）に立てられていました。古墳を立派に飾るのに必要な埴輪を自前で生産できる豪族が存在したことがわかります。

6世紀初頭以降、これまで古墳を築造してきた地域とは別に、新たに古墳をつくるようになる地域も現れ、急激に古墳や横穴墓の数が増加しました。このことは、『日本書紀』安閑天皇元年閏12月の条にある、かさほらのあたのおみ笠原直使主とおき同族の小杵が、武蔵国造の地位を争い（武蔵国造の乱）、勝利した笠原直使主が朝廷に献上した4つの屯倉の記事が想起されます。市域に置かれた橘花屯倉の経営にかかわる在地豪族は、屯倉を通じてヤマト政権とのつながりを確保したことで、安定的な地域経営が可能となり、新興勢力として域内各地に古墳や横穴墓を盛んに築造しました。

塚越古墳（幸区）は、6世紀半ば過ぎの築造で、南関東では最古級の横穴式石室を持っており、武蔵国造の乱で活躍した世代の豪族の墓と考えられます。

5世紀末から6世紀にかけて多摩川下流域では、有力豪族の古墳が一つの地域に集中せず、西福寺古墳（5世紀末）→二子塚古墳（6世紀前半）→上丸子古墳（6世紀中頃）と小地域を移動して築造されています。下流域の小地域が輪番的に交代して地域を代表していた様子がわかります。

7世紀になると、有力な古墳が築造される場所が、高津区の梶ヶ谷周辺（馬絹古墳・法界塚古墳）と、幸区の加瀬山周辺に集中します。

集落では、5世紀後半から住居の中に渡来人が持ち込んだカマドが作られるようになり、



白山古墳の三角縁神獣鏡（複製）
（川崎市市民ミュージアム所蔵 原品 慶應義塾）



白井坂埴輪窯跡の埴輪



塚越古墳

それに^{こしき}応じて甕や甗の姿は長い胴をもつ形に変化していきます。この時期には新作遺跡（高津区）や影向寺遺跡（宮前区）で発見されているように、朝鮮半島から製作技術が伝わり生産が始まった須恵器も用いられました。遺跡の数も増えており、人口が増加していたことがうかがえます。

多摩川下流域の沖積低地では、後背湿地を利用した水田が展開していたものと考えられ、中原区宮内の自然堤防上には水辺の祭祀の痕跡が遺されています。

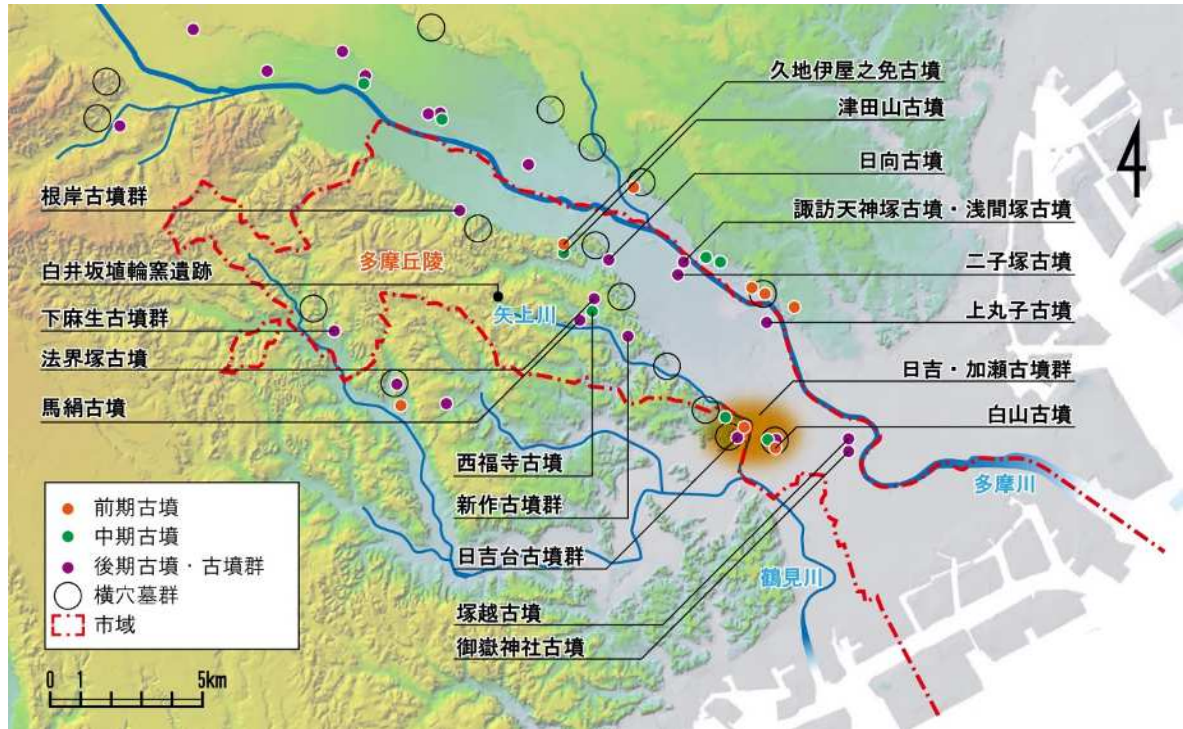


図 17 主な古墳の位置／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

(2) 古代

ア 律令制と市域

7世紀の半ばには、天皇を中心とした中央集権国家を目指し、律令制に基づく国づくりが進められました。市域では、武蔵国に属した地方行政組織として橘樹評家^{ひょうけ}が設置され、8世紀初めには大宝律令に基づき郡家^{ぐうけ}に変遷しました。市域の大部分は橘樹郡に属しており、駅路近くに郡家正倉院が置かれ、租調庸の徴税・収蔵等、中央集権国家の一端を担いました。橘樹郡から納められた税のうち、租（稲）は、地方の財源として武蔵国府（東京都府中市）の正倉院に備蓄され、調や庸として納められた布等は、国府へ運ばれ国司の署名と武蔵国の印を押印したうえで都へ運ばれました。



「无射志国荏原評」と刻まれた瓦

郡家の西側には、7世紀末創建の寺院跡が発見された影向寺遺跡（宮前区）があり、地方豪族である郡司が氏寺として寺院を造ることで、地域の精神的な連帯を図った可能性が考えられます。この古代寺院からは、都筑郡（現在の横浜市北西部）を表す「都」や「无射志国荏原評」^{むさしのくにえぼらこおり}（現在の東京都南東部）と刻まれた瓦が発見されており、郡域を越えたつながりの中で建立された可能性が高いことも注目されます。

有馬川や平瀬川などの流域の多摩丘陵上には、火葬骨蔵器が濃密に分布しているのが特徴で、早くから仏教が浸透していたことを表しています。

平安時代の初期には、全国で班田の不足が深刻化し、未墾地の耕地化を進めるために認めた土地の私有化が進んだことにより、公地公民制の基本原則が崩壊していきました。9世紀には橘樹郡家が衰退して、市域では律令制社会が立ち行かなくなっていました。



橘樹官衙遺跡群正倉院の整備イメージ

イ 荘園と市域

平安時代後期の市域には、南部に河崎荘、現在の幸区には加瀬（加勢）荘、中原区には丸子荘、中原区から高津区にまたがる地域には稲毛荘等の荘園が成立していたことが文献からうかがえます。『武蔵国稲毛本荘検注目録』〔承安元（1171）年〕には、稲毛郷・小田中郷・井田郷等の新しい地名が登場し、律令制による地方行政がゆるみ、荘園の編成を通して新しい地域のまとまりが生まれていった様子を表しています。稲毛荘の田で収穫された米はその一部が在地領主や本所（中央の荘園領主）から派遣された現地管理者に支給され、あるいは治水工事費等に蓄えられた以外は、年貢として本所へ送られました。遠隔地であるため、特産品の米を絹に換算して本所へ送付していました。

稲毛荘は藤原摂関家に寄進されたことから、藤原氏の氏神である奈良春日大社の分霊を荘内の鎮守として祀り、その祭祀や社殿の維持を賄うために稲毛郷の田の一部が充てられています。この鎮守が現在の中原区宮内の春日神社で、宮内は稲毛荘内の中心的な位置を占めていました。また、春日神社に隣接する常楽寺には、浅く柔軟な衣文表現や丸い穏やかな表情が特徴の12世紀頃に造立された木造聖観世音菩薩像が伝わっています。

稲毛荘以外は資料が少なく、詳しいことは明らかではありません。加瀬荘の域内では、加瀬山南麓で出土した秋草文壺や、越路遺跡出土青白磁四耳壺が注目されます。秋草文壺は12世紀末の渥美焼、越路遺跡出土青白磁四耳壺は県内でも最古の部類に入る舶載陶磁器で、相当の富と権力を有した人物が存在したことを裏付けています。丸子荘においては、山王権現（日吉大社西本宮）の分霊を勧請し、丸子山王権現（現在の日枝神社）が創建されています。この頃、影向寺の木造薬師如来両脇土像や麻生区の岡上東光院の木造兜跋毘沙門天立像、麻生区高石法雲寺の木造阿弥陀如来坐像など、穏やかな表情を特徴とする和様の要素が認められる仏像が造立されています。



国宝 秋草文壺
（慶應義塾 所蔵）

（3）中世

ア 中世の市域

平安時代末期には、武蔵平氏の稲毛三郎重成が稲毛荘の在地領主となりました。稲毛重成は、鎌倉幕府成立後、頼朝に仕えて文治5（1189）年の奥州征伐にも従っています。北条政子の妹であった妻が亡くなった後は、本拠地の稲毛荘の館を居所（多摩区枳形の広福寺との伝承がある）としていましたが、元久2（1205）年に畠山重忠謀殺事件の工作者の嫌疑を受け、北条氏により一族が滅ぼされました。

これにより、北条氏による武蔵国の支配が本格化します。承久3（1221）年には、比叡山延暦寺大乘院領であった稲毛本荘は関東御領（幕府直轄領）となり、幕府政治が御家人による合議制から北条得宗家による専制政治へ進む中で、事実上の北条得宗家領になりました。

多摩川に沿って続く多摩丘陵には、小沢城、寺尾城、枳形城、作延城、井田城等の山城が築かれていました。また、この丘陵上の宮前区平には源頼義が奥州遠征の成功を願って八幡祠を創建、源頼朝が建久3（1192）年に再建したと伝えられる白幡八幡大神があるほか、

多摩区長尾には「源家累代の祈願所」として源頼朝が特に重視した威光寺（現・妙楽寺）が置かれ、頼朝の異母弟・阿野全成が派遣されたことから、多摩丘陵が鎌倉にとって重要な意味を持っていたことがうかがえます。

加瀬山の熊野神社境内の浅間塚経塚（幸区）や井田経塚（中原区）では12世紀から13世紀の常滑焼壺や片口鉢が出土しています。鶴見川の上流域や支流域では、この頃の国産陶磁器が多数発見されており、先進的な文物が流入していたこと、河川を利用した交通が発達していたことがわかります。

元弘3（1333）年に上野国で挙兵した新田義貞の軍勢が鎌倉を目指して南下するのに対し、久米川の戦い（現在の東京都東村山市）に敗れた幕府軍は多摩丘陵の諸城を兵で固めました。同年5月16日の丘陵直下の分倍河原での激戦が、新田軍による鎌倉侵攻の突破口となりました。

鎌倉幕府の終焉により、北条氏とその家臣の所領は没収され、その後の南北朝の動乱期を経て新たな領主が配置されました。

足利尊氏が開いた室町幕府は、政治の中心を再び京都へ移し、鎌倉には関東地方の支配機関として鎌倉府を置きました。尊氏は武蔵国の守護と国司に任命され、川崎市域を含む武蔵の南部は鎌倉に近いこともあり、早くから足利氏の支配を受けました。

足利尊氏と鎌倉の足利直義の対立により引き起こされた観応の擾乱^{じょうらん}では、尊氏派の高麗経澄が挙兵して武蔵府中に進み、多摩川を渡って直義派の前線基地である小沢城を焼き払いました。これにより直義方の敗色は決定的となり、内乱は終息しました。



威光寺に関わる胎内銘をもつ
妙楽寺の木造日光菩薩像



図18 多摩丘陵上の主な城館・寺院の分布／「地理院地図（電子国土Web）」（国土地理院）を加工して作成

鎌倉府が比較的安定していた 14 世紀後半から 15 世紀前半は、戦乱は収まり、寺社の復興が盛んでした。麻生郷の王禅寺は、開創が延喜 21 (921) 年〔寺伝では延喜 17 (917) 年〕と伝えられる古刹です。14 世紀中頃に金沢称名寺延命院（横浜市金沢区）の等海が中興し、禅・律・真言の三宗兼学の道場として栄え、別当には鎌倉鶴岡八幡宮の俊誉や印融といった学僧が迎えられました。

能満寺（高津区）では、この時期に鎌倉仏師の朝祐による木造虚空蔵菩薩立像が造立されています。

また、調布深大寺の僧長弁によって、長尾威光寺の梵鐘勧進、影向寺の伽藍再興、河崎山王社の大般若経施入等の勧進活動が活発に行われています。威光寺では、永正 6 (1509) 年に薬師如来坐像が造立され、さらにその後脇侍が造立されています（木造薬師如来両脇侍像として多摩区妙楽寺に現存）。



王禅寺仁王門

享徳 3 (1454) 年に、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を殺害すると、鎌倉公方と関東管領上杉氏との対立が激化し、関東各地で争いが起こりました（享徳の乱）。この争いに関東管領の上杉氏が勝利したことで、鎌倉府による関東の支配は終焉を迎え、武蔵・相模の一带は関東管領の支配下に置かれました。これを背景に、市域では、各地の地侍が台頭し、内乱の中で上杉氏の家老であった長尾氏や太田氏のもとで活躍しました。

イ 後北条氏の支配と市域

一方、小田原に拠点を置いた後北条氏は、相模や武蔵へと進出を図ります。大永 4 (1524) 年、北条氏綱は太田道灌の孫にあたる太田資高と通じ、江戸城を奪取し、市域は完全に後北条氏の支配下に組み込まれました。

後北条氏による領国経営の様相は、市域に遺されている後北条氏が発した文書からうかがえます。当初は知行人を介した間接的な支配だったものが、代を重ねるごとに直接領民を掌握するようになり、宛先も村の名主百姓にあてたものが発給されるようになっていきます。



泉沢寺文書（後北条氏制札）

後北条氏は、領国拡大の過程で婚姻関係を結ぶことで有力領主と宥和を図っています。足利氏を出自とする吉良氏は、蒔田（現在の横浜市の一部）と世田谷に領地を持っており、一部市域にも勢力が及んでいました。後北条氏は、その伝統的な勢力を無視せず、2 代氏綱も 3 代氏康もその娘を吉良氏に嫁がせました。吉良頼康は天文 19 (1550) 年、上小田中（現在の中原区）に菩提寺泉沢寺を再興して寺領を寄進し、上小田中の市を繁栄させるため諸役の免除を許す等、居住を奨励しています。

天正 18 (1590) 年、豊臣秀吉による小田原攻めが行われ後北条氏は滅亡し、小田原城に入城した秀吉は、関東の後北条氏旧領を徳川家康に与えました。

(4) 近世

ア 徳川幕府による地域開発

徳川家康は関東へ入国すると、江戸城を政治の中心に据え、軍事・民政の面から領国経営を行いました。江戸の防衛の体制を強化し、後背地である関東平野を灌漑・治水により開発し農業生産地に転換していくため、江戸と多摩川を隔てて近接する本市域は、多摩川沿いの平坦地は直轄地化され、丘陵地は直属の中小家臣の知行地や寺領として割り振られました。

家康は南関東一円の生産力向上の一環として、小泉次大夫に命じ慶長2（1597）年2月、多摩川下流の世田谷・六郷と稲毛・川崎の四か領の用水掘削のための測量に着手させます。小泉次大夫は小杉村に陣屋を置き、測量や工事の指揮をとり、周辺の農民を参加させ上流に向かって開削を進め、慶長16（1611）年に二ヶ領用水と六郷用水を完成させました。

江戸が政治の中心地になると、関東の主要な交通路が整備されました。幕府は元和9（1623）

年には川崎を東海道の宿駅として正式に認めたほか、市域を横断する脇往還を整備します。このうち、中原往還は江戸虎ノ門を起点とし、丸子の渡しを過ぎて市域に入り、小杉を経て野川・久末を通り、平塚の中原御殿に至って東海道に合流する脇往還です。小杉は商人荷物の取り扱いで賑わったほか、江戸時代前期には家康や秀忠の江戸・駿府の往復に利用され、将軍家の休憩所として小杉御殿が置かれました。市域にはこれらの道に道標や道標を兼ねた石造物が多く建てられました。

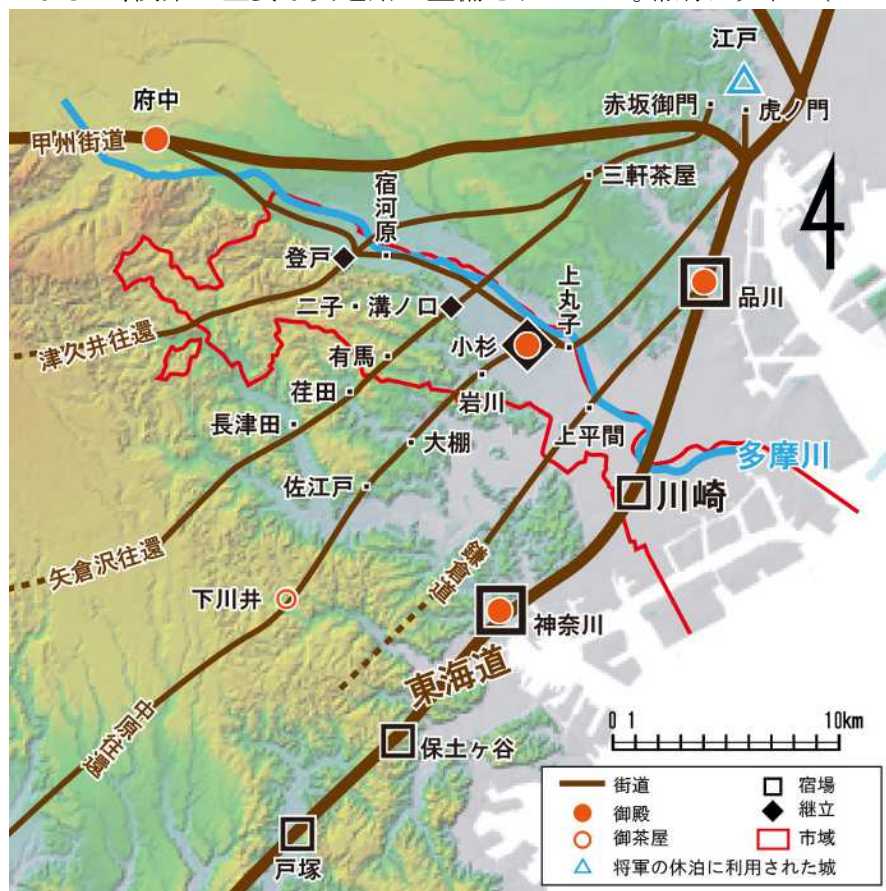


図19 近世の市域周辺の交通路・宿の位置／
「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

イ 新田開発と殖産興業

享保期には、窮乏した幕府財政の立て直しのため新田開発を促進する政策がとられました。これを受け、市域では天真寺新田や池上新田を開発したり、田中休愚による多摩川や二ヶ領用水の改修で灌漑面積が拡大したりしています。

池上新田は、池上幸豊が「笹だし（浅瀬に杭を立て笹で囲み土砂を効率よく溜める）」と

いう手法で遠浅の海を埋立て開発したもので、新田開発史上極めて画期的な事業でした。また、幸豊は殖産興業の取組として甘蔗栽培に取り組み、和製砂糖の製造に挑んでいます。

一方で、多摩川の氾濫を原因とした境界争いや、旱ばつの際の用水をめぐる争いも頻発し、文政4（1821）年の溝ノ口村水騒動は、幕府の沙汰を受ける大きな事件となりました。なお、市域北西部の菅・中野島・五反田・登戸の各村では、府中領大丸村（現在の稲城市）で多摩川から取水する大丸用水を利用していました。旱ばつなどがあると、大丸用水を利用する村々の間でも、同じように水をめぐる争いが起きました。

商品経済の発達とともに、大師河原の梨や桃の栽培、中野島の和唐紙、多摩丘陵一帯の黒川炭、溝ノ口の醤油製造、王禅寺村の柿栽培、多摩川の鮎漁等が盛んになりました。



現在のニヶ領用水（宿河原線）

ウ 川崎大師と民間信仰

江戸時代後期には、大師河原の川崎大師平間寺への災厄消除の信仰が将軍や御三卿等支配階級の人たちの間に広まり、帰依する人が多くなります。宝暦6（1756）年には御三卿の田安宗武による宝篋印塔の寄進があり、11代将軍家斉の4度の参詣をはじめ、その後歴代将軍がしばしば参詣したため、堂宇の整備も行われました。一方で、庶民の間でも信仰が盛んになり、江戸で行われた出開帳に多くの参詣者が集まり、川崎大師は隆盛を極めました。

また、影向寺では、薬師如来に対する眼病平癒の信仰が盛んで、「向いめ」など絵馬が多く遺されています。ほかにも五穀豊穡や疫病退散、あるいは雨乞いに関連して一人立三匹獅子舞が小向・初山・菅に現在でも伝えられているほか、獅子頭が延命寺（幸区）に遺されています。その年の吉凶を占う射的行事なども、この頃から市域各地で行われていました。



図20 近世の主な文化財の位置／「地理院地図（電子国土Web）」（国土地理院）を加工して作成

(5) 近代

ア 明治維新後の市域

慶応3(1867)年、15代将軍慶喜の大政奉還により江戸幕府が崩壊し、明治の新政が始まります。明治4(1871)年の廃藩置県によって川崎市域も神奈川県の管轄下となりました。

明治5(1872)年9月に新橋―横浜間に我が国最初の鉄道が開通し、川崎駅が設置されました。この鉄道開通は川崎大師の参詣者をさらに増加させましたが、東海道川崎宿には大きな打撃を与えることになりました。明治31(1898)年に立川勇次郎が発起人となった大師電気鉄道株式会社が創立され、翌年1月には川崎町六郷橋―大師河原間の営業が開始されました。電気鉄道は日本で3番目、関東では最も早い営業開始でした。4月からは名称を京浜電気鉄道と改め、その後の敷設延長により明治38(1905)年には品川海岸―神奈川間が開通しています。当初は川崎大師に参詣客を運ぶために敷設された鉄道でしたが、京浜間に路線を拡張するに及んで、京浜臨海工業地帯の通勤客を運ぶ重要な足となっていきました。

また、幸区戸手の多摩川河畔には、明治19(1886)年に御幸煉瓦製造所が操業し、東京や横浜へ煉瓦を出荷しています。

一方、多摩丘陵上の農村には、養蚕具の製作所としてスタートした農機具メーカー細王舎も発足しています。繭から生糸を取る座繰機に独自の工夫を加えて売り出し、その後開発製造した足踏み式回転脱穀機「ミノル式親玉号」は、日本全国のみならずアジア各地に販路を広げました。



御幸煉瓦製造所

『企画展 産業都市・カワサキのあゆみ 100 年』
川崎市市民ミュージアム 2007 年 より転載)

イ 工業都市化への道

日露戦争後、川崎町の地元有力者の間では、更なる発展を図るため工場誘致を促進しようという機運が次第に盛り上がり、明治43(1910)年11月に川崎町長に就任した石井泰助は道路・上水道・河川の整備を行い、工場を積極的に誘致する方針を打ち出しました。

それに伴い、横浜精糖株式会社(後に明治製糖株式会社)や東京電気株式会社(後に株式会社東芝)が川崎町へ進出しました。これらを契機に、日米蓄音器製造株式会社(後に日本コロムビア株式会社)、鈴木商店(後に味の素株式会社)など、明治末から大正初期にかけて川崎町を中心とした多摩川下流地域に相次いで工場が建設され、川崎の工業都市化が急速に進展しました。



日清製粉株式会社鶴見工場/『川崎市要覧』
昭和4(1929)年(川崎市市民ミュージアム所蔵)

また、多摩川河口から鶴見川河口に至る臨海地帯においては、浅野総一郎らが海浜の埋立を行い、用地を拡大して工場の新設を行い、さらに活発な工業化を図りました。現在の鶴見区潮田地先に旭硝子株式会社が進出して以降、浅野造船所(後に日本鋼管鶴見造船所)、現在の川崎区大川町に日清製粉株式会社鶴見工場が進出するなど工場が次々に建設されていきました。

一方、工業の発展は人口の増加とともに工場地と一般住宅地の区画の整理や、水道や道路の整備を含めた市街地整備を必要とし、川崎町域の急速な都市化をもたらしました。

近代的な工場が誘致されたことで、そこで働く人々も各地から集まってきました。特に沖縄の人々は富士瓦斯紡績の女子工員として、またその親戚縁者も多く京浜工業地帯へ移り住み、故郷を懐かしんで沖縄の民俗芸能を川崎に根付かせました。

大正 13（1924）年 7 月、川崎町・御幸村・大師町が合併し、横浜・横須賀について神奈川県下 3 番目の市として川崎市が誕生しました。以後、昭和に入ると、市勢の発展を図るため、隣接した町村を相次いで合併編入し、市域を拡大していきました。

- | | |
|----------|---------|
| ①東京製綱 | ⑮富士電機 |
| ②明治製糖 | ⑯日本鑄造 |
| ③東京電気 | ⑰日本電力 |
| ④日本蓄音器商会 | ⑱日清製粉 |
| ⑤鈴木商店 | ⑲東京電灯 |
| ⑥富士瓦斯紡績 | ⑳日本鋼管 |
| ⑦旭硝子 | ㉑鉄道発電 |
| ⑧浅野造船所 | ㉒日本鋼材 |
| ⑨日本鑄造 | ㉓浅野セメント |
| ⑩芝浦製作所 | ㉔日本鋼管 |
| ⑪日本ヒューム管 | ㉕昭和電工 |
| ⑫東京瓦斯 | ㉖芝浦製作所 |
| ⑬大日本化学 | |
| ⑭秋田木材 | |



図 21 海浜の埋立と工業都市化の変遷／「地理院地図（電子国土 Web）」（国土地理院）を加工して作成

この頃の市域の産業構造は、多摩川下流域や臨海部での工業の著しい伸長に伴う工業都市化の一方で、それ以外の地域の主産業は農業でした。多摩川低地は米作の割合が大きかったのに対し、丘陵地は相対的に畑作が多く、麦作がその作付面積の多くを占めていました。多くの農村では換金性の高い作物の栽培や園芸農業・果樹栽培等に力を入れ、安定した経営を目指すようになりました。代表的なものでは、市ノ坪の草花、馬絹の花木、土橋の筍、多摩川梨、桃やいちじく、柿等の果樹栽培が盛んに行われ、首都として発展する東京の消費を支えました。特に明治 26（1893）年に大師河原村（現在の川崎区）の当麻辰次郎によって育成された「長十郎梨」は、病虫害に強く、甘くて多産であるとして、多摩川流域一帯で盛んに栽培され、多摩川梨の商標で出荷されました。また、田島村大島（現在の川崎区）では、吉沢寅之助が「伝十郎桃」を明治 29（1896）年に発見しました。風味がよく、栽培しやすかったことから、近隣にも普及しました。大師河原では、大正 6（1917）年の高潮被害以後、果樹の生産が減少し、市域北部での果樹栽培が盛んになっていきました。

また柿生や岡上（現在の麻生区）では地区をあげて養蚕に取り組み、横浜からの生糸輸出を下支えしていましたが、大正末期に起こった糸の価格や諸物価の暴落を契機に衰退してしまいました。

大師河原では、海苔養殖や貝類等の漁労、製塩が盛んに行われました。しかし、明治 38 (1905) 年に塩が専売制となった上、明治 43 (1910) 年に個人の製塩が禁止され、更に同年の台風により大師地区の塩田が大きな被害を受けたことを契機に製塩業は衰退しました。

大正 12 (1923) 年の関東大震災は、東京や横浜に大きな被害をもたらした。その復興のため砂利の需要が急激に高まり、多摩川の両岸で盛んに砂利の採掘が行われました。大正の終わり頃には六郷橋から丸子付近まで掘り尽くされ、採掘場所は次第に上流へと遡っていき、それにつれて多摩川砂利鉄道（後に南武鉄道、現在の JR 南武線）等の鉄道網も充実していきました。



大師河原の貝漁の様子

（『企画展 産業都市・カワサキのあゆみ
100 年』川崎市市民ミュージアム 2007 年
より転載）

ウ 戦争の拡大と市域

関東大震災、昭和恐慌と続いた社会的な動揺は、市民生活をはじめ産業・経済界等に深刻な影響をもたらしましたが、昭和 6 (1931) 年に勃発した満州事変は、国家財政を緊縮財政から軍備拡張を図るための積極財政に転換させることになりました。川崎市では、物資の輸送をより円滑にするため、多摩川沿いと海沿いの工場を結ぶ運河を建設し、両岸を工場や住宅地にする運河・河港計画を立てました。この計画の一環として川崎河



川崎河港水門

港水門が建設され、昭和 10 (1935) 年には都市計画運河として国の許可を得ましたが、昭和 18 (1943) 年にアジア太平洋戦争の激化により計画は廃止されました。

この時期に市域における工業は軍事産業化の色彩を強め、軍需景気に支えられた重工業を中心に急激な発展を遂げました。これにより、臨海部の工場増設は飽和状態を迎え、貨物輸送の利便に恵まれていた南武鉄道（後の JR 南武線）の沿線に工場の新設が盛んになりました。特に電気機械器具の製造を主体とした金属・機械工業が過半数を占める内陸部工業地帯が形成されていきました。昭和 17 (1942) 年には、市の人口は 37 万人を数え、市外からの工場通勤者は 14 万人を超えていました。このような状況の中、臨海部の工場に通勤する人々の交通機関は京浜急行大師線と鶴見臨港鉄道（後の JR 鶴見線）、川崎鶴見臨港バスが中心で、工場の生産増強に大きな支障を来していました。このため、市では市営電車の建設を決め、文字どおりの突貫工事により、昭和 19 (1944) 年 10 月に川崎～東渡田間の営業を開始しました。

戦争の拡大は軍需産業の強化につながり、本市の工業は発展しましたが、その反面、国民生活は物資の不足から物価の高騰や買い占め等に悩まされました。空襲は、昭和 17 (1942) 年 4 月から終戦までに十数回受けています。そのうち、昭和 20 (1945) 年 4 月 4 日の空襲では、大師・川崎地区から中原・高津まで広範囲に及び、川崎大師平間寺の主要堂塔も被災しました。次いで 4 月 15 日には、臨海部から多摩区まで B29 による空爆を受けています。

市域南部では昭和 19(1944) 年以後、空襲の激化に伴い学童疎開が始まりました。

市域には軍関係の重要な施設も置かれています。昭和 5 (1930) 年には、海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊通信基地が置かれました。その後、戦局の悪化に伴い、敵の爆撃に耐え得る「耐強受信所（蟹ヶ谷地下壕）」が作られ、海軍の作戦遂行状況を把握し、横浜市日吉の海軍司令部へ地下ケーブルを使って情報を伝達していました。また、生田（多摩区）には、第 9 陸軍技術研究所（登戸研究所）が置かれ、防諜（スパイ防止）・諜報（スパイ活動）・謀略（破壊・攪乱活動・暗殺）・宣伝（人心の誘導）のための兵器や資材を研究・開発していました。

（6）現代

ア 戦後復興と高度経済成長

川崎市は戦災復興の基本方針を、有利な立地条件を生かしながら、工業都市としての発展を図ることとし、交通・防災・衛生等の事業計画に積極的に取り組み、それまで東京・横浜に頼っていた商業等についても自主的な発展を図り、各地区間の交通を整備していくことを重視しました。

この方針に基づき、昭和 25 (1950) 年に市営バスが開業、翌 26 (1951) 年には臨海部の工場への輸送手段の改善を目的に市営トロリーバスが川崎駅前一桜本間で開業しました。また、市営埠頭の建設と川崎港の拡充、さらに上下水道の整備や清掃事業の充実等を図っていきました。し尿処理では、大小便をより早く簡単に収集するため、川崎市は全国で初めて汲取ホースとタンクを積んだバキュームカーを開発し、汲取の機械化を行いました。

昭和 30 年代になると、京浜工業地帯の中心である川崎の工業は目覚ましい躍進を遂げます。特に消費景気の波に乗り、電気機械器具が大きく生産額を上げ、これに輸送機器と器具製造業が続きました。

一方で、工業地帯が発展するにつれて埋立が進み、昭和 46 (1971) 年に成立した漁業補償協定により、大師河原の漁場や漁業権は放棄され、海苔生産をはじめとした大師河原の漁労はその終焉を迎えました。

市域の工場操業が盛んになるとともに、市民の暮らしは豊かになっていきましたが、一方で工場から排出される煤煙や排水は市民の健康を脅かす原因になりました。ぜんそくに苦しむ人や光化学スモックによる健康被害が多く発生したことから、市では公害を防ぎ、市民の生命と健康を守るために、国の基準よりも厳しい公害防止条例を制定しました。工場も有害物質を除去する装置の設置や、燃料の変更等の対策を行いました。市・企業・市民それぞれの努力により、昭和 50 (1975) 年頃には産業型公害は、かなり改善されました。

昭和 41 (1966) 年の東急田園都市線の開通によって多摩田園都市の開発計画が促進され、ますます人口が増加するようになりました。一方で市北西部の緑豊かな丘陵地帯の里山風景はこの開発によりほとんど姿を消しました。



大型し尿処理用ヴァキュームポンプカー
/ 『清掃事業機械化処理器材アルバム』
（川崎市立図書館所蔵）

この頃、工場再配置促進法により、移転促進地域に指定された川崎市域では、工場の跡地利用は大規模な再開発が難しい市域南部の社会資本整備のチャンスになりました。東京製綱川崎工場跡地（幸区）には、昭和 46（1971）年、神奈川県と市が共同で河原町団地を建設することになりました。この建築は、都市部の住宅需要が増えていった時代に、高密度高層住宅団地のよりよい住環境を追求して建設され、建物内部の公共空間の獲得と、南北の軸に平行の 2 棟が内庭を挟んで対面する形式で各住居の日照時間確保が意図されていました。



河原町団地

昭和 47（1972）年 4 月 1 日には政令指定都市に移行し、川崎・幸・中原・高津・多摩の 5 つの行政区が誕生しました。その後、市域西北部の開発に伴う人口増に対して、行政サービスの均衡を図るため、昭和 57（1982）年に高津区から宮前区、多摩区から麻生区が分区され、現在の行政区が完成しています。

また、昭和 63（1988）年に施行された公文書館法に先駆け、昭和 59（1984）年 10 月に、統合的な情報公開を推進する施設として川崎市公文書館が置かれました。重要な公文書その他の記録は、市民の信託を受けた市の活動の記録であり、一部は貴重な歴史的・文化的資料として後世に伝えるものとして、適切に保管しています。

イ 現代の川崎市

1980 年代から製造企業は研究開発型や研究開発専門の研究所へと転換し、本市は生産拠点から研究開発・イノベーション拠点へと変遷しており、現在、市内には、民間企業・大学等の研究開発拠点が 550 ヶ所以上立地しています。1980 年代の産業構造の大きな変化を受け、平成元（1989）年には、神奈川県と川崎市が共同で、かながわサイエンスパーク（KSP）を設立、インキュベーション機能、新製品・新技術開発機能、技術移転機能の 3 つの機能を複合化したサイエンスパークとして活動を開始しました。その後、幸区にかわさき新産業創造センター、川崎区のテクノハブイノベーション川崎（Think）が整備されています。

臨海部では、個々の工場や事業所が廃棄物の排出抑制を行うとともに近在の工場と異業種間の連携により排出物の相互の再利用・再資源化、エネルギーの有効利用を進める資源循環型工業団地が活動するなど、環境技術を活かした取組を進めています。

かつて企業の生産拠点であった広大な工場用地は、都市型の大型マンション群として再開発され、年々、新しい住民が増加しています。近年では羽田空港の国際化に伴い、多摩川対岸の川崎区殿町地区に「殿町国際戦略拠点キングスカイフロント」が開発され、健康、医療、福祉、環境分野の最先端研究が行われています。

経済のグローバル化により、社会状況が大きく様変わりする中、人材の交流も活発になり市に定住する外国人市民も増加しています。

平成 29（2017）年 4 月には、市の人口が 150 万人を超えており、ますます都市化が進んでいることがうかがえます。

2 川崎市の歴史文化の特徴

市域の自然環境や歴史的背景、文化財の状況を踏まえ、その特徴を5つに整理しました。

(1) 丘陵で営まれた暮らし

市域の地形は、丘陵やそれに続く台地と沖積低地におおよそ二分されています。丘陵部は東名高速道路をおおよそその境として西に丘陵（多摩面）、東に台地（下末吉面）に分けられます。多摩丘陵を流れる三沢川・五反田川・平瀬川・矢上川・有馬川等の小河川は、いずれも多摩川又は鶴見川に合流しています。丘陵は河川の浸食が進み、やせ尾根が目立つのに対し、台地上は比較的平坦な土地が広がっています。

多摩丘陵には旧石器時代から人間の活動の痕跡が遺され、縄文時代には丘陵や台地の環境を生かして食料の確保が行われました。農耕が主な生業になってからも長く、谷戸の水辺や里山の自然を活用し、人々の生活が継続的に営まれてきました。

丘陵の北側は急峻な斜面で多摩川の沖積地と画されていて、丘陵や台地の縁からは多摩川の対岸までを一望することができます。古代の役所跡である橘樹官衙遺跡群は、古代の官道に近い、眺望に優れた台地上に置かれました。中世の山城も、多摩丘陵上の多摩川の渡河点を見下ろす交通の要衝に築かれました。

丘陵や台地上では、太平洋戦争の空襲被害が少なかったほか、本格的な都市開発が比較的遅く始まったこともあいまって多くの文化財が遺されており、谷戸の環境や斜面緑地も部分的に残されています。

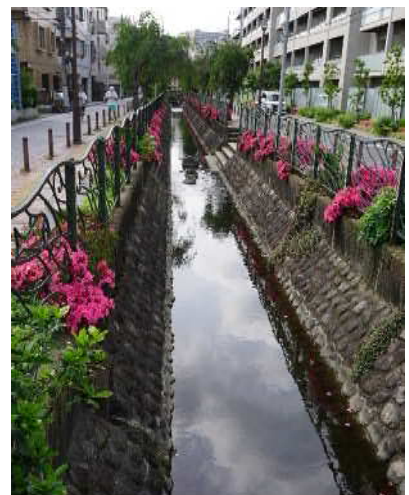


小沢城（切り立った北側斜面）

(2) 水辺に育まれた地域

縄文時代に丘陵や台地の上で生活していた人々は、縄文海進により内陸まで入り込んだ海の資源を利用していました。その後、海退など環境の変化や技術の進歩とともに、沖積低地へも活動の場を広げていきました。低地での人々の暮らしは、しばしば河川の氾濫に翻弄されましたが、やがて網のように巡らされた用水の整備や、多摩川の河川改修工事などにより豊かな穀倉地帯が生まれました。しかし、早ばつや新堀の開削をめぐる水争いや、用水の補修に係る費用の負担に関する争論もたびたび起きています。二ヶ領用水は、農業用水としての役割を終えた現代でも、水辺の緑地が整備され市域の都市環境を形成しています。

多摩川と鶴見川の河口に挟まれた臨海部では、江戸時代中期以後、遠浅の海で塩田や貝・小魚を採取する半農半漁の生活のかたわら、新田開発が進められました。近代にはその水運の利を生かして工業地帯が形成されていきます。工業化に伴う人口増に対応するため、上水道が整備され、このことが近隣町村の合併による川崎市誕生、その後の市域の拡大の一つの要因になりました。



二ヶ領用水（溝口周辺）

（３）各時代に取り込まれてきた最先端の文化や技術

三角縁神獣鏡を副葬していた白山古墳、南関東では初現期の横穴式石室を持つ塚越古墳、截石切組積みで構築された複室構造をもつ馬絹古墳など、市域の古墳は、その時期の最新の文化や築造技術が取り入れられています。

ヤマト政権の直轄地である橘花屯倉が置かれた後には、律令体制へつづく国づくりの初期の地方支配拠点である評家が千年伊勢山台（現在の高津区）に置かれています。また、当時最先端の仏教文化が早くから市域にもたらされ、寺院が造営され、火葬の風習が取り入れられています。秋草文壺や越路遺跡出土の青白磁四耳壺のような優品の火葬骨蔵器も注目されます。

中世にも中央の権力者と所領を介した結び付きがあり、威光寺（現・妙楽寺）は頼朝の弟全成を迎え源家累代の祈祷所として、王禅寺は鎌倉の鶴岡八幡宮から学僧を迎え、研究道場として栄えました。戦国時代の市域を支配した後北条氏は楽市政策を進めましたが、上小田中を領有する吉良氏もその政策を取り入れ、上小田中の市場から泉沢寺の堀際までを寺門前に指定し楽市としています。

近世には、池上幸豊が、幕府の殖産興業政策を具現化するため、「笹だし」の手法を用いた海中新田開発や甘蔗栽培に取り組んでいます。

近代では、市域に進出した大工場では最新の生産技術が導入され、京浜埋立など大規模な事業に投資がされてきました。



馬絹古墳の石室内部

（４）江戸を支える社会基盤の整備により発展したまちとにぎわい

家康の関東入国を契機として、在地の領主層は解体され、市域は旗本（幕府の家臣団）や増上寺等の寺社の所領に割り当てられました。それとともに市域は、首都である江戸の人々の生活を支える経済圏としての役割が期待され、二ヶ領用水や大丸用水が開削され、新田開発が進められました。

江戸を起点とする交通網の中継点として宿場や継立村が置かれ、東海道の川崎宿、中原往還の小杉、矢倉沢往還（大山街道）の二子・溝口、津久井道の登戸は交通の要衝として賑わうようになりました。

これらの交通網は鉄道や幹線道路として、宿場や継立村は鉄道主要駅周辺の商業地域として、市域の構造が現代まで引き継がれています。

江戸時代中期になると、窮乏した幕府財政の立て直しのため新田開発が奨励され、商品経済の発達とともに梨や柿、黒川炭や和唐紙等特産品が生まれ、ますます江戸を支える地域としての性格を強めました。



蔵造りの建物が残る大山街道

江戸時代後半には、川崎大師をはじめ市内の各地が『江戸名所図会』等にも取り上げられ、江戸近郊の行楽地として人々に親しまれました。厄除け信仰とともに綱下げ松の松寿弁才天、泉福寺の泥中出現薬師如来等、御利益を求め爆発的な人気を博した流行神もありました。

（５）日本の近代工業化を牽引しつつ拡大・発展した都市

近代になると、東京と横浜に挟まれ、多摩川や東京湾の水運や、京浜間の鉄道といった交通の便の良さや、低廉な用地を売りものに、積極的に工場の誘致を進めました。また、浅野総一郎による京浜埋立で工場用地や港湾が整備され、工場の進出が相次ぎました。

工業都市化の波は、昭和 10（1935）年頃から多摩川砂利の運搬のために敷設された南武鉄道（後に JR 南武線）沿線に広がり、電気・通信機器・航空機関係の工場が進出し、やがて戦時体制強化のために再編整備され、物資や生産工程も軍部に管理されました。

戦後の復興期には石炭・鉄鋼などの基幹産業に優先的に資材や原料が供給されたことで、市域の工業は息を吹き返しました。戦後拡大された埋立地には、石油製油所が多く進出し、日本最大級の石油化学コンビナートが形成され、行政も港湾や用水の改修を積極的に行うことで工業を振興し、戦後日本の高度経済成長を牽引することになりました。

大規模な工場が集積し、人口の増えた川崎市には、近代以後、現在に至るまで各地から労働者が移り住みました。バキュームカーの開発や公害対策等、大都市の生活や衛生環境の改善が図られました。これに加えて昭和 40 年代以降は、東京のベッドタウンとしての都市開発が進められ、田園都市線や小田急多摩線沿線の西北部の丘陵地帯では住宅地が広がり、人口が急激に増加しました。

近年では、市域の企業用地の多くは生産拠点から研究開発・イノベーション拠点へと変化しており、社会経済の状況や人材の交流も活発になって、ますます発展を続けています。



多摩丘陵に広がる住宅地（宮前区鷺沼周辺）